

ダイズ紫斑病の基幹防除を徹底してください

令和3年5月1日
鳥取県産米改良協会

○令和2年産種子の紫斑病発生状況と今作の防除対策

- ・昨年は紫斑病の発生が多かったため、一部で紫斑粒の混入がみられます。
- ・このような種子を用いても、発芽障害、生育障害の多発は起きません。
- ・しかし、種子伝染により発病した茎葉等が、紫斑粒の伝染源となります。
- ・発病を最小限に抑えるために、例年と同様に薬剤による基幹防除(種子消毒と茎葉散布)を徹底してください(薬剤の例は裏面参照。)

※ご不明な点は、各指導機関にご相談ください。

○紫斑病の伝染方法と防除対策

紫斑粒の発生→気象の影響大
(子実肥大期以降の高温と多雨)



【莢・子実に伝染】



【紫斑粒】



【茎葉に伝染】
(見かけ健全)



【子葉等に伝染】

茎葉散布

種子消毒

※薬剤防除だけではなく、排水対策や適期収穫の実施も有効です。

防除薬剤の例

1. 種子消毒

- ・クルーザーMAXX(原液8 mL/乾燥種子1kgの種子塗沫処理)
または
- ・クルーザーFS30(原液6 mL/乾燥種子1kgの種子塗沫処理)
→キヒゲンR-2(原液20 mL/乾燥種子1kgの種子塗沫処理)の
体系処理

2. 茎葉散布

○水和剤の場合

- ・アミスター20フロアブル
開花20～35日後に1回
2000倍で100 L/10a または 3000倍で150 L/10a
※展着剤を加用すること。

○粉剤の場合

- ・スミチオンベルコート粉剤DL
開花15～20日後とその10日後の2回
3 kg/10a
※本剤の防除効果はアミスター20フロアブルと比較してやや劣る。

※害虫防除は栽培地域の発生状況に適した薬剤を選択して実施する。

※記載した薬剤の情報は2021年4月30日現在のものである。